

この病気この治療

— 子宮がん（中国新聞11面H19年9月26日）

検診で頸がん発見を 不正出血する体がん

発生する部位で大きく2種類に分けられる子宮がん。このうち子宮頸がんは、20-30歳代の若い女性に増えている。5月に亡くなったZARDの坂井泉水さんもこの病気と闘った。検診などで早期発見すれば完治する可能性が高いだけに、正しく理解したい。一方、子宮体がんは更年期以降に多い。日本婦人科腫瘍学会専門医で、広島市立安佐市民病院（安佐北区）の永井宣隆産婦人科部長（55）に子宮がんの原因や治療法を聞いた。（上杉智己）

— 子宮がんの種類は。

子宮入り口のできる「子宮頸がん」と、子宮内膜のできる「子宮体がん」がある。子宮がん全体に占める発症者は頸がん約6割、体がん約4割。危険因子として、頸がんは特定のウイルスが、体がんは女性ホルモンが、深く関係することが分かっている。

— 頸がんにかかわるウイルスとは。

性交渉を通じて感染するヒトパピローマウイルス（HPV）のこと。女性の約8割は感染経験があるといわれ、特殊な感染症ではない。感染しても大半の人はウイルスが自然に消失するが、約1割の人は「持続感染」にな

る。これが続くと、子宮頸部が「異形成」と呼ばれる状態に変化することがあり、さらに、ごく一部の人が段階を経て頸がんに至るまで進行する。

初期は症状なし

— 頸がんの症状は。

初期は症状がほとんどない。自覚しにくいだけに、検診を積極的に受けて初期での発見につなげることが大切。妊娠時に偶然、見つかるケースもある。進行すると月経以外の不正出血のほか、茶褐色や膿のような帯下（おりもの）、下腹痛、腰痛、下肢の浮腫などがみられる。診断は、綿棒で子宮の入り口の細胞をこすり取って観察する細胞診から始めるケースが多い。

— どんな治療を。

手術が中心になる。特に初期の場合、子宮入り口を円錐状に切除する方法で、治療後の妊娠・分娩が可能。通常30分前後の手術で数日間入院する。がん細胞が手術で取りきれない段階に進行している場合、放射線療法や抗がん剤治療などを取り入れる。最近は抗がん剤でがんを小さくして手術したり、放射線療法と抗がん剤を併用するなど、組み合わせによる手法も少なくない。

— 体がんの原因は。

体がんになりやすい傾向として、①更年期を過ぎている②排卵障害や月

経不順がある③妊娠・分娩の経験がない一などが挙げられる。患者の75%は閉経後に発症し、多くは女性ホルモンのエストロゲンが関与している。若い女性でも排卵障害が長期にわたる場合のほか、肥満も発症との関連がある。また、更年期障害の治療でエストロゲン含有のホルモン剤服用を単独で長期に続けると、体がんになるリスクが増えるとの報告がある。

— 体がんの症状は。

ほぼすべてに不正出血がある。特に閉経後の出血は注意するべきだ。下腹痛のほか20歳、30歳代は月経不順や不妊を訴えるケースもある。細い器具を子宮に挿入して内膜の組織をとり、確定診断する。超音波検査などの画像診断も用いる。

ホルモン療法も

— 体がんの治療は。

手術が9割以上を占める。子宮を全摘出するのが基本で、通常は子宮とともに両側の卵巣も切除する。がんの広がり具合によっては子宮ばかりでなく、リンパ節など周囲の組織を含めて摘出する。ほかには抗がん剤治療や放射線療法がある。

妊娠を強く望み、どうしても子宮を残したい場合、初期の体がんに限ってはホルモン療法を選択することもある。女性ホルモンのプロゲステロンを約3-6ヶ月間服用する方法で、初期の体がんに対して約5割が治癒し

たとの研究データがある。しかし、転移の危険を伴い、再発例もあるので慎重な判断を要する。

— 検診はどう受けたらいいですか。

自治体の子宮頸がん検診は20歳以上を対象に、2年に1回受けられる。自己負担は千円前後。子宮体がんの場合は、不正出血があったら一度は婦人科を受診することを勧めたい。

